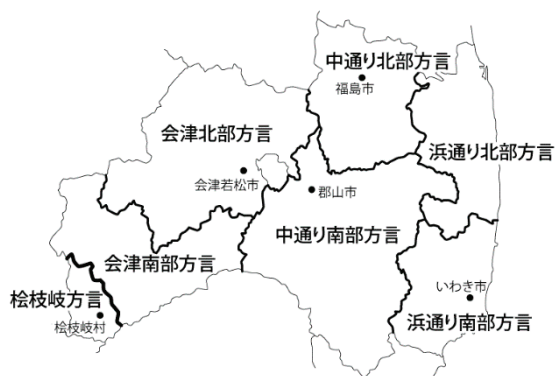


福島県福島市方言



福島県方言区画図

【福島県の方言区画】東北の最南端に位置する福島県の方言は、そのほとんどが南奥方言の性質を有するが、地域による若干の違いも認められる。

県域は阿武隈高地と奥羽山脈によって東西に大きく3区分され、東から一般に浜通り地方、中通り地方、会津地方と呼称される。山地によって相互の交流がある程度制限され、方言差が生じている。さらに県南部には栃木県や茨城県など北関東方言との共通性も認められ、宮城県方言や山形県方言の影響が色濃い県北部との差異が見られる。飯豊（1964）はこの点を重視し、福島県東南部を東関東方言として独立させるが、実際には他地域との方言の異なりは連続的なものにとらえたほうがよく、例えば山形県の内陸方言/庄内方言の違い、青森県の津軽方言/南部方言の対立といった明確な方言差とはみなしがたい。大局的には福島県のほとんどの地域が同一の方言区画に属し、その中に細かな地域差が存在するとみるべきであろう。ただし、会津地方南西部の檜枝岐方言は、アクセントの区別を持つ一方でガ行鼻濁音を有しないなど、県内他地域の方言との差異が著しく、古くから「言語の島」として有名である。

以上より、福島県方言の区画を図のように示す。檜枝岐方言が他地域とまず大きく区画され、さらに東西および南北にゆるやかに各地が区分される。とりわけ北部から南部にかけての差異は漸近的であり、明確な境界を定めるのは難しい。

【福島市方言について】福島市は県中北部に位置する福島県の県庁所在地であり、県内の行政・経済の中心地である。戦後から周辺農村との合併によって市域を拡大し、いわゆる昭和の大合併を経て、1970年代におおよそ現在の市域が成立した。平成大合併時には隣接する旧伊達郡飯野町を併合した。合併以前の旧町村間で、俚言や共通語化の進捗などに異なりが認められるものの、市内の方言は隣接する伊達市、伊達郡を含めておおよそ等質とみなしうる。菅野（1982）はこの地域の方言を信達方言と呼び、同一の方言圏とみなしている。

福島市方言の音声は以下のような南奥方言的特徴を有す。(1) 母音イウは中舌母音であり、共通語のシス、チツ、ジズにあたる音の区別がない。(2) イとエも母音単独で発音される場合、区別されない。(3) 連母音アエに由来する母音エァ (/ɛ/) を持つ。(4) 共通語のカタ行音にあたる音の子音が(有声)母音間で有声化し、濁音となる。(5) 無アクセント方言である。(1)(3)の特徴は現代の高年層(おおよそ1940年代以前生まれ)でも失われつつある。一方(2)の特徴は根強く残る。また(4)(5)については現代の中年層(おおよそ1970年代以前生まれ)にも認められる。

タレカ(怠け者)、オダツ(調子に乗ってはしゃぐ)といった、隣接する宮城県方言と共通の俚言が見られるなど、東北方言の要素が濃く、関東方言的な県南部の方言との異なりを示す。

【表記について】上記(1)~(4)の音声特徴については、現代の高年層にも認められる(2)と(4)のみを表記に反映させる。(2)共通語のイとエにあたる音は区別せずにエで表記する。さらに本来福島市方言で区別されていた/e/と/ɛ/も書き分けをせず、すべてエ段の仮名で示す。他にガ行鼻濁音はカ行に半濁点を付す。語末の長音は短呼化したり脱落したりすることも多いが、例文を除き、「一」で代表して示す。

なお引用した例文については上記によらず原典のままとする(ただし、句読点や一部記号については他との統一のため変更した箇所がある)。

【調査概要】本稿の記述はおおむね以下にもとづく。
 (1) 福島県内諸方言の記述調査(1994年実施。福島市のインフォーマントは1920年生まれ・調査当時74歳。)
 (2) 福島市内多人数方言調査(2000～01年実施。インフォーマントは1920～70年代生まれ・調査当時20～80代、約80名。)
 (3) 方言の形成過程解明のための全国方言調査(FPJD)(福島市の調査は2011年実施。インフォーマントは1932年生まれ・調査当時78歳。)

この他、半沢の内省も用いている(1966年福島生まれ。0-19歳:福島市、20-31歳:仙台市、32-33歳:津市、34歳-現在:福島市。両親とも福島市生まれ)。

例文は幡(2005)、清野(2007)、福島大(2015)

によった。幡(2005)には福島市南部の高年層インフォーマント6名(いずれも1920年代生まれ、2004年調査当時70～80代)による談話資料が掲載されている。言語形成期を福島市で過ごした4名のインフォーマントの発話から例文を採った。清野(2007)は(3)FPJDのインフォーマントによる昔話語りのCDである。福島大(2015)にも同じ方による昔話語りの文字化資料が掲載されている。各例文の共通語訳は半沢が行った。

出典を示していない例文は、上記(1)～(3)調査のインフォーマントの回答および半沢の作例によるものである。

福島県福島市方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る
終 止 類	断定非過去	カグ	ミル	クル
	断定過去	カエダ	ミダ	キタ
	命令	カゲ カガッセ カガンシヨ	ミロ ミラッセ ミランシヨ	コー コラッセ コランシヨ
	禁止	カグナ カガンナ	ミンナ ミランナ	クンナ コランナ
	意志	カグペー	ミッペー	クッペー
	推量	カグペー	ミッペー	クッペー
接 続 類	連体非過去	カグ	ミル	クル
	連体過去	カエダ	ミダ	キタ
	中止	カエデ	ミデ	キテ
	仮定	カゲバ カエダラ カグド	ミレバ ミダラ ミット	クレバ キタラ クット
派 生 類	否定	カガネー	ミネー	コネー
	丁寧	カグゾエ	ミツツオエ	クツツオエ
	使役	カガセル	ミラセル	コラセル
	受身	カガレル カゲル	ミラレル	コラレル
	可能	カガレル	ミラレル	コラレル
	尊敬	カガル	ミラル	コラル
	継続	カエッタ カエデル	ミッタ ミデル	キッタ キテル
	希望	カギデー	ミデー	キテー
	のだ	カグンダ	ミンダ	クンダ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
g	書く kag・u	カエ-ダ	g を e にする。-タが-ダになる。「歩く」は g を Q (促音) にし「アルッ-タ」。
ŋ	泳ぐ ojon・u	オヨエ-ダ	ŋ を e にする。-タが-ダになる。「行く」「死ぬ」は ŋ をそれぞれ Q (促音)、N (撥音) にし「エッ-タ」「シン-ダ」。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
d/z	立つ taz・u	タッ-タ	d/z を Q (促音) にする。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	b を N (撥音) にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	m を N (撥音) にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	r を Q (促音) にする。
w/ø	買う ka(w)・u	カッ-タ	w を Q (促音) にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終止類	断定非過去	アガエ アゲー	シズガダ	ガクセーダ
	断定過去	アガガッタ アゲーガッタ	シズガダッタ	ガクセーダッタ
	推量	アガガンベー アゲーガンベー アガエベー アゲーベー	シズガダベー	ガクセーダベー
接続類	連体非過去	アガエ アゲー	シズガナ	《ガクセーノ》
	連体過去	アガガッタ アゲーガッタ	シズガダッタ	ガクセーダッタ
	中止	アガクテ アゲークテ	シズガデ	ガクセーデ
	仮定	アガグレバ アガガッタラ アガエド アゲーゲレバ アゲーガッタラ アゲード	シズガダラ	ガクセーダラ
派生類	否定	アガグネー アゲーグネー	シズガデネー	ガクセーデネー
	なる	アガグナル アゲーグナル	シズガンナル	ガクセー>NNナル
	丁寧	アガエゾエ アゲーゾエ	シズガダゾエ	ガクセーダゾエ
	のだ	アガエンダ アゲーエンダ	シズガナンダ	ガクセーナンダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型には a 類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類)動詞、一段型には b 類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞および「スル」(する)が所属する。本来の福島市方言ではシス音が区別されないため、「スル」の活用型については判断の難しいところがあるが、シスの区別を有する高年層では基幹がシに統一され、一段型の活用となる。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ段の4形、および音便形がある。「カグ」(書く)の場合、カガ-ネー(kag・a-neR)、カギ-デー(kag・i-deR)、カグ(kag・u)、カゲ(kag・e)、カエダ(kae・da)など。意志・推量形はカグベーとなり、共通語などに見られるオ段形は持たない。また、語幹末子音には、g(ガ行)、ŋ(カ行)、s(サ行)、d/z(ダ行)、b(バ行)、m(マ行)、r(ラ行)、w/ø(ワ行)がある。語例は、表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

一段型には、ミ-ル(mi-ru)、オギ-ル(og i-ru)など基幹末拍がイ段の動詞と、デ-ル(de-ru)、アゲ-ル(ag e-ru)など基幹末拍がエ段の動詞がある。使役形はミ-ラセルのようになる。r語幹化は共通語よりやや進行している。

「クル」(来る)は唯一不規則な活用をする。一段型に近い活用をするが、キ-タ(k・i-ta)、ク-ル(k・u-ru)、コ-ネー(k・o-neR)のように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段にわたる。県南部では、キ-ネー(k・i-neR)、キ-レバ(k・i-reba)、キ-ランニエー(k・i-raNnjeR)などが聞かれ、より一段型に近づく。県最南部の矢祭町では、高年層にク-ネー(k・u-neR)、ク-ランニエー(k・u-raNnjeR)などが観察され、基幹をクに統一しようとする変化が生じたことをうかがわせる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

多段型動詞は「カグ」など基幹ウ段形となる。ただし語幹末子音wの動詞は「カー」(買う)「モラー」(もらう)のように基幹ア段長音形となることがある。一段型動詞は「ミル」など「基幹(=語幹)+

ル」、「来る」は「基幹ウ段形+ル」で「クル」となる。

- ・アシタ テカ° ミ カグ。(明日手紙を書く。)
- ・ソーユーノ ヨック ハナシ キグネ。(そこの、よく話を聞くね。)[幡 2005]
- ・アシタモ コゴサ クル。(明日もここに来る。)

〈断定過去形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」は基幹イ段形「キ」に「タ」をそれぞれ後接し、「カエダ」「ミダ」「キタ」のようになる。「タ」は語幹末子音ŋ・b・mの多段型動詞に後接する以外でも有声化して「ダ」となる。ただし無声化した母音や促音に後接する場合は有声化しない。

- ・オッカヤント イッショニ アルツタ。(お母さんと一緒に歩いた。)[幡 2005]
- ・イー コトバ デダ ホラ。(いい言葉が出た、ほら。)[幡 2005]
- ・オレーノデンワ ドンドン キタ。(お礼の電話が次々と来た。)[幡 2005]

福島県方言では、動詞の活用に関わって、リおよびレ音に子音tが後接すると、当該拍が促音化するとともに後接するt音が口蓋化するという(形態音韻論的)規則が広く存在する(井上 2000)。このため、一段型動詞の基幹末音がリまたはレの場合は以下のようになる。

- ・おれに教えてくつちや。(俺に教えてくれた。)[福島大 2015]
- ・アレワ ナミダ コボッチャ。(あれは涙がこぼれた。)[幡 2005]
- ・カネ タッチャ。(お金が足りた。)

〈命令形〉

多段型動詞では「カゲ」など基幹エ段形、一段型動詞では「ミロ」など「基幹(=語幹)+ロ」となり、共通語と変わらない。「来る」はオ段長音形「コー」となる。

- ・オハルー キョーワ ムキ° ツゲ。(お春、今日は麦を搗げ。)[清野 2007]
- ・オメ シャベレ。(お前が話せ。)[幡 2005]
- ・ナナジ ナッタガラ オギロヨ。(7時になったから起きろよ。)
- ・バゲツ タンカ° イデゴ。(バケツを持って来

い。) [幡 2005]

尊敬形式をともなった命令形は「カガンショ」「ミランショ」「コランショ」など「ンショ」形と「カガッセ」「ミラッセ」「コラッセ」など「ッセ」形の2種類が存在する。多段型動詞の基幹ア段形に「ンショ」「ッセ」、一段動詞の基幹(=語幹)および「クル」の基幹オ段形「コ」に「ランショ」「ラッセ」がそれぞれ後接する。「ンショ」形のほうが「ッセ」形よりも待遇価が高いと判断する話者が多い。分布をみると福島市の中心部では「ンショ」形が優勢であり、後発の形式と推測される。また周辺部には「シラッセ」「コッセ」などの形が見られることから「シラッセ」「コラッセ」などがr語幹化の一環で生じた形式とみなしうる。

- ・フタツツモ クワセ。(ふたつも食べなさい。)
[幡 2005]
- ・アカ[°] ッテ コランショ。(上がってきてください。)[清野 2007]
- ・オメノ ジューヨーニ シラッセ。(あなたのいいようになさい。)[清野 2007]

〈禁止形〉

いずれの動詞も断定非過去形に「ナ」を後接する。断定非過去形の末尾がルで終わる動詞ではルが撥音化して「ミンナ」「クンナ」のようになる。

- ・トイガラ イク[°]ナヨッテ (遠いから行くなよって) [幡 2005]
- ・コッチ ミンナデ。(こっちを見るなよ。)

尊敬形式をともなった禁止形は「カガンナ」「ミランナ」「コランナ」のようになる。後述する尊敬形式「カカル」「ミラル」などに「ナ」を後接したもの。南部には一部「カガサンナ」「ミッサンナ」などの形式も聞かれる。これは隣接する旧安達郡や二本松市の方言の影響を受けたものである。

- ・ムリシテ エカ[°]ンナ。(無理して行きなさんな。)

〈意志形〉

意志形はもっぱら「ペー」を用いる。このため、多段型動詞では基幹オ段形を欠く。いずれの動詞も非過去断定形に「ペー」を後接し「カグペー」「ミッペー」「クッペー」のようになる。非過去断定形の末尾がルで終わる動詞ではルが促音化するとともに「ペー」も「ペー」となる。

「ペー」は「オヨンペー」(泳ごう)「ノンペー」(飲もう)など、語幹末子音がŋやmの多段型動詞でも生じる。この際、動詞の末尾音はいずれも撥音化する。周辺部の高年層には無声化しない「ノンペー」などの形も見られるため、これら動詞のペー形は比較的近年になって生じたものと考えられる。

- ・サテ ケーッペド オモッタラナ (さて帰ろうと思ったらな) [清野 2007]
- ・どうだがわがねべげど呼んでくっぺ。(どうか分からないだろうが呼んで来よう。)[福島大 2015]

〈推量形〉

推量形は意志形と同形である。〈確認要求〉には「ペー」のほか、「シタ」を後接した「ベンシタ」も用いられる。

- ・トリアケ[°] ッテイウドゴ アッペシタ。(取上(地名)っていうところがあるでしょう。)
[幡 2005]

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。連体非過去形の末尾がルで終わる動詞に形式名詞や準体助詞が後接する場合、ルが後接する語の語頭子音に依じて促音化または撥音化する。

- ・クーカ[°]ナ ネーガラ ミヅオ ノンデ (食べるものがないから水を飲んで) [幡 2005]
- ・クーゴド シルヤズダ。(食事の準備をする人だ。)
- ・ゲコアンテ トットゴデネガッタ。(蛙なんて捕るどころではなかった。)[幡 2005]
- ・山にあつとぎ表になって (山にあるときに表になって) [福島大 2015]
- ・この融さまを見んのには (この源融様を見るのには) [福島大 2015]
- ・ヌケ[°] ッコドワ デギルワ。(逃げることはできるよ。)[清野 2007]

〈連体過去形〉

連体過去形は断定非過去形と同形である。

- ・スイガ フイダカ[°]ナワ オイデガラ。(西瓜を拭いたものは置いてから。)[幡 2005]
- ・シコ[°] ニジメーニ キタハズナノニ (4、5日前に来たはずなのに) [清野 2007]
- ・チー ナカ[°] ッチャドゴワ アガボリデ (血

が流れたところは赤堀(地名)で) [幡 2005]

〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」は基幹イ段形「キ」に「テ」をそれぞれ後接し、「カエデ」「ミデ」「キテ」のようになる。「テ」は断定過去形の「タ」の場合と同様の音環境で有声化し「デ」となる。

- ・ニカ[°] イゾツテ ウソ コイデ (苦いぞって嘘をついて) [幡 2005]
- ・アンタ コレ トツテ (あなた、これを取って) [幡 2005]
- ・コー ツグツテ アナ アゲデ (こう作って、穴を開けて) [幡 2005]

〈断定過去形〉に示した(形態音韻論的)規則により、一段型動詞の基幹(=語幹)末拍がりまたはレの場合、中止形は以下ようになる。さらに近年では「チェ」から「チ」へと変化している(井上 1985)。

- ・クタビツチェ ヤツチャグネ ハー。(くたびれてもうやりたくない。)
- ・アガポリサ チー ナガッチ (赤堀(地名)に血が流れて) [幡 2005]

〈仮定形〉

仮定形は複数の形式が併存する。

(1) 多段型動詞の基幹エ段形に「バ」、一段型動詞の基幹(=語幹)および「来る」の基幹ウ段形「ク」に「レバ」をそれぞれ後接した「カゲバ」「ミレバ」「クレバ」という形式。「来る」については、県中南部では「キレバ」も聞かれる。また県中部の若年層に一部「コレバ」という形式も確認され、いずれも基幹を統一しようとする変化の兆しが認められる。これらは福島市では一般的ではない。

(2) 多段型動詞の基幹音便形、一段型動詞の基幹(=語幹)および「来る」の基幹イ段形「キ」に「タラ」をそれぞれ後接した「カエダラ」「ミダラ」「キタラ」という形式。「タラ」は断定過去形の「タ」などの場合と同様の音環境で有声化して「ダラ」となる。

(3) 断定非過去形に「ト」を後接した「カグド」「ミット」「クット」という形式。「ト」の有声化の条件も「タラ」などと同様。

- ・**ニ キゲバ ヨゲーマデニ ワガンダゲド (** (人名)に聞けば、なお詳しく分か

るんだけど) [幡 2005]

- ・タサ ハイレバ ビルダ。(田んぼに入ったら蛭(が)いるん)だよ。) [幡 2005]
- ・クロヂサ キタラ (黒内(地名)へ来たたら) [幡 2005]
- ・ト[°]ツテイク[°] ド ホソット (通って行ったら、そうしたら) [幡 2005]
- ・アギンナット サムグナツテクット (秋になったら、寒くなってきたら) [幡 2005]

〈否定形〉

多段型動詞は基幹ア段形、一段型動詞は基幹(=語幹)、「来る」は基幹オ段形「コ」に「ネー」がそれぞれ後接し、「カガネー」「ミネー」「コネー」のようになる。「来る」については、県南部に「キネー」や「クネー」が見られ、一段型動詞化の兆しがあるが、福島市では聞かれない。否定形は形容詞に準じた活用をする。

- ・マダ テー フガネガ。(まだ手を拭かないか。) [幡 2005]
- ・ワガンネ キガネ。(分からない 聞かない。) [幡 2005]
- ・イマワ ヤツパリ カーチャンニ カナネ。(今はやはり奥さんにはかなわない。) [幡 2005]
- ・ホンデモ ゴクラグニ エネグレバ (それでも極楽にいなければ) [清野 2007]
- ・オハルナンテ コネガッタゾエ。(お春なんて来なかったです。) [清野 2007]

福島県方言では、動詞の活用に関わって、ラ、リ、レ音に子音 n が後接すると、当該拍が撥音化する(井上 2000)。語幹末子音 r の多段型動詞の否定形は以下ようになる。ただし「知らない」は例外的に次の一段型動詞と同じ形をとる。

- ・D チャン ソレ キンネデ ナンダイ。(Dちゃん、それを切らないでどうしたの。) [幡 2005]
- ・イイツツテ ヤナガッタノ。(いいって言ってやらなかったの。) [幡 2005]
- ・今はちーともとんねで (今は少しも捕らないで) [福島大 2015]
- ・キミカ[°] ヨワ シンニーヒト イッパイ。(「君が代」を知らない人がたくさんいる。) [幡 2005]

一段型動詞の基幹末音がりまたはレの場合はさらに後接する「ネー」の子音 n も口蓋化して「ニュー」となる。〈中止形〉において「チェ」が「チ」へ変化しつつあるのと同様に、こちらも「ニュー」から「ニー」への変化が進んでいる。

- ・マーダ タンニエ。(まだ足りない。)[清野 2007]
- ・ミズ サッパリ ナカ ンニ。(水が全く流れない。)

〈丁寧形〉

いわゆる「マス」形は現在では一般に使用されるものの共通語の影響によるものと考えられ、本来の方言の形式ではない。断定非過去形に「ゾエ」を後接して丁寧な意を添える。末尾がルで終わる動詞ではルが促音化して「ミツツオエ」「クツツオエ」のようになる。「エ」が敬意を示すと考えられ、たとえば目上に対して「ノムゾ」ということはできない。「エ」は「ナエ・ガエ・ワエ」など他の終助詞にも後接しうる。県中部(郡山市付近)では、「ベー」に「エ」が後接した形式の過剰修正形「バエ」も確認される。

〈使役形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「セル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラセル」が、「来る」は基幹オ段形「コ」に「ラセル」がそれぞれ後接し、「カガセル」「ミラセル」「コラセル」のようになる。使役形では r 語幹化による形式が県内に広く認められる。使役形は一段型動詞に準じた活用をする。

- ・ヨグ ヤラセラレルネ。(よくさせられるね。)[幡 2005]
- ・タタセタノ ワスレテ カエツチャッタダト。(立たせたの忘れて帰ってしまったんだって。)[幡 2005]
- ・ヘータイ ズラーット ナラバセデ (兵隊をずらっと並ばせて)[幡 2005]
- ・シケン ウゲラセッカド オモー。(試験を受けさせようかと思う。)

〈受身形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「レル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラレル」が、「来る」は基幹オ段形「コ」に「ラレル」がそれぞれ後接し、「カガレル」「ミラレル」「コラレル」のようになる。

- ・ソー ユワレット キラレナイカラ (そう言

われると切れないから)[幡 2005]

- ・ホダゴド イウド オゴラレカナンナイ。(そんなこと言うと怒られるからね。)[幡 2005]

受身形は一段型動詞に準じた活用をする。〈断定過去形〉に示した規則にしたがい、さらに t 音を後接する場合は以下のようになる。

- ・クエツテ ユワツチャドギ (食えて言われた時)[幡 2005]
- ・ソレガ ブグワツチ (それが追いかけて)[幡 2005]
- ・はだがつちやくねえやづは (叩かれたくない奴は)[福島大 2015]

〈可能形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「レル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラレル」が、「来る」は基幹オ段形「コ」に「ラレル」がそれぞれ後接し、「カガレル」「ミラレル」「コラレル」のようになる。

多段型動詞の基幹エ段形に「ル」を後接する「カゲル」なども使用される。いわゆる「能力可能」と「状況可能」の区別はない。

可能形は一段型動詞に準じた活用をする。

可能否定形では、〈否定形〉に示した規則によって、レ音が撥音化するとともに後接する「ネー」が口蓋化する。

- ・イカ° ンニヨーニ ナツチャッタノ。(行けないようになってしまったの。)[幡 2005]
- ・ネーガラ アケ° ランニガッタ。(ないから上げられなかった。)[幡 2005]
- ・イマワ ミランニベシタ。(今は見ることができないじゃないか。)[幡 2005]
- ・ひとつつもとんにやぐなっちまった。(少しも取れなくなってしまった。)[福島大 2015]

〈尊敬形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「ル」が、一段型動詞は基幹(=語幹)に「ラル」が、「来る」は基幹オ段形「コ」に「ラル」がそれぞれ後接し、「カガル」「ミラル」「コラル」のようになる。尊敬形は多段型動詞に準じた活用をする。

- ・ダエトグボー ドゴサガ エカ° ツタツケゾ。(大徳坊(大男)はどこかへいらっしゃったそうだよ。)[清野 2007]
- ・このもちずりの里までこらったんだど。(この

もちずりの里までおいでになったんだそう
だ。) [福島大 2015]

〈継続形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹(=語幹)に、「来る」は基幹イ段形「キ」に、「テル」または「ッタ」がそれぞれ後接する。「テル」は断定過去形の「タ」などの場合と同様の音環境で有声化し、「デル」となる。

- ・アハハッテ ミデンノ。(あははって(笑って) 見ているの。)[幡 2005]
- ・アドワ ワスツチンナ ハー。(後はもう忘れてるな。)[幡 2005]
- ・ショーセツ ヨミ シテンダ。(小説を読んでいるんだ。)[幡 2005]

「ッタ」は「ていた」に由来するもの。多段型動詞のうち語幹末子音が d/z, r, w/ø の動詞および「行く」「歩く」では、促音の連続を避けて「タツタダ」「アルツタダ」などとなる。また語幹末子音 ŋ, m, b の動詞では「ノンツタ」「ナランツタ」のようになる。これも特殊拍の連続を嫌って「ツタ」の促音が脱落した「ノンタ」「ナランタ」などが聞かれる。

- ・アッコガラ ヒーツタンダ。(あそこから引いていたんだ。)[幡 2005]
- ・ミヅ アケツタンダ。(水をあげていたんだ。)[幡 2005]
- ・オレ コバン ヒロウカ[°] ナ ミツタナ。(俺が小判を拾うのを見ていたな。)[清野 2007]
- ・オグツテ キタンダカト オモツタ。(送ってきたのかと思っていた。)[幡 2005]

〈希望形〉

多段型動詞は基幹イ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は基幹イ段形に「テー」がそれぞれ後接し、「カギデー」「ミデー」「キテー」のようになる。「テー」は断定過去形の「タ」などの場合と同様の音環境で有声化し、「デー」となる。形容詞に準じた活用をする。

- ・じっちゃんに会いで。(おじいさん会いたい。)[福島大 2015]
- ・スイガ クイダクテ (西瓜が食べたくて) [幡 2005]
- ・オッカサマ タスケデ モラエデ。(お母さんを助けてもらいたい。)[清野 2007]

語幹末子音が r の多段型動詞および基幹末拍が「リ・レ」となる一段型動詞では、〈断定過去形〉に示した規則によって、〈希望形〉は以下ようになる。

〈中止形〉の場合と同様、「チェー」は「チー」に変化しつつある。

- ・イズガ バガンシテ ヤツチェナー。(いつか騙してやりたいなあ。)[清野 2007]
- ・メンキョ トツチー。(免許を取りたい。)
- ・ハヤグ ワスツチェ。(早く忘れたい。)

近年、類推によってこの形式がすべての動詞に拡張した。さらに語幹末子音 r の多段型動詞でも基幹イ段形に「ツチー」を後接する形が生じた。ただしこの形式は 1990 年代以降生まれ世代では衰退している。

- ・アノ エーカ[°] ミツチナー。(あの映画みたいなあ。)
- ・コーコー ヤメツチ。(高校を辞めたい。)
- ・マダ コゴサ キツチ。(またここに来たい。)
- ・メンキョ トリツチ。(免許を取りたい。)
- ・ウジサ カエリツチー。(家に帰りたい。)

〈のだ形〉

連体非過去形に「ンダ」を後接し、「カグンダ」「ミンダ」「クンダ」のようになる。連体非過去形がルで終わる動詞では末尾のルが撥音となる。その際、撥音の連続を避けて 1 拍分のンが脱落する。動詞に助動詞ダを直接後接する「カグダ」のような形式は、県西部の会津地方や、浜通り北部の相双地方に観察されるが、福島市では一般的ではない。

- ・キンニョツテ ユンダ。(昨日を) キンニョって言うんだ。)
- ・クー タノスミ アンダガラ (食べる楽しみがあるんだから) [幡 2005]
- ・ウン アソゴ トーンダ。(うん、あそこを通るんだ。)[幡 2005]

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の活用の型はひとつである。〈断定非過去形〉において語末母音が融合する形容詞では、〈断定非過去形〉の融合形がそのまま語幹となる例が見られる。融合形語幹の安定度は語によって異なるようだ。「ない」「悪い」などでは安定的に出現する一方、

「赤い」「高い」などでは融合形語幹と非融合形語幹が併存する。

〈断定非過去形〉

語幹に「エ」を後接する。語幹末母音が a の場合、「エ」と融合して「アゲー」のようになることがある。他の母音では基本的に融合が起こりにくいが、一部例外が存在する。

- ・オメー ナニ オッカネー。(お前は何か怖い?) [清野 2007]
- ・モッタイナーナード オモウンダデ。(もったいないと思うんだよ。) [幡 2005]
- ・ヘッテモ ゼワ。(入ってもいいよ。) [幡 2005]
- ・ズエブン アガリゴド。(ずいぶん明るいこと。)

〈断定過去形〉

「アガガッタ」「アゲーガッタ」のように、語幹に動詞的な接辞「ガッ」を後接し、さらに「タ」を付す。融合した母音を回帰し、断定非過去形の非融合形がそのまま語幹となる形式も見られる。

- ・ムカシワネー カコ° カ° ネガッタ。(昔はかごがなかった。) [幡 2005]
- ・ンメーガッタ。(おいしかった。) [幡 2005]
- ・コワイガッタヨ。(恐ろしかったよ。) [幡 2005]
- ・ホタルカコ° ホシガッタンダワ。(蛍を入れるかごがほしかったんだよ。) [幡 2005]

〈推量形〉

「アガガンベ」など、語幹に動詞的な接辞「ガン」を後接し、さらに「ベー」を付す。なお近年は〈断定非過去形〉に「ベー」を直接後接する形が一般的となった。

- ・ソゴワ アズガンベナー。(そこは暑いだろいなあ。)
- ・ソゴワ アズエベー。(そこは暑いだろう。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。

- ・うつつぐしい色ん染まったんだど (きれいな色に染まったそうだ) [福島大 2015]
- ・コッチノ アダラシーノ (こっちの新しいの) [幡 2005]
- ・デゲーカ° ナ ホシー。(大きいのが欲しい。)

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形である。

〈中止形〉

「アガクテ」「アゲークテ」など、語幹に接辞「ク」を後接し、さらに「テ」を付す。「クテ」のクの母音が無声化するため、クやテは有声音にならない。

- ・ヒヤッコクテ (冷たくて) [幡 2005]

〈仮定形〉

動詞と同様、複数の形式が併存する。

- (1) 「アガケレバ」「アゲーケレバ」など、語幹に「ケレバ」を後接する。
- (2) 「アガガッタラ」「アゲーガッタラ」など、語幹に動詞的な接辞「ガッ」を後接し、さらに「タラ」を付す。
- (3) 「アガエド」「アゲド」など、断定非過去形に「ド」を後接する。

- ・エマチット ヤスエド エーндаゲンチョ。(もう少し安いといいのだが。)
- ・タゲガッタラ コマル。(高かったら困る。)

〈否定形〉

「アガグネー」「アゲーグネー」など、語幹に接辞「グ」を後接し、さらに「ネー」を付す。

- ・アヅグネーンダゾイ スイガワ。(厚くないんですよ、西瓜は。) [幡 2005]
- ・ナンダ オモシヤグネーナー。(なんだ、面白くないなあ。) [清野 2007]
- ・カネ ネグナッタ。(金がなくなった。)

〈なる形〉

「アガグナル」「アゲーグナル」など、語幹に接辞「グ」を後接し、さらに「ナル」を付す。

- ・チー スード マンマルコグナッテ (血を吸うとまん丸くなって) [幡 2005]
- ・ソド クレীগナッタ。(外は暗くなった。)
- ・グアエ ワリグナッテキタ。(具合悪くなってきた。)

〈丁寧形〉

断定非過去形に「ゾエ」を付す。

〈のだ形〉

連体非過去形に「ンダ」を後接する。

- ・カコ° カ° ネーンダ。(かごがないんだ。) [幡 2005]
- ・ニジャーログ? ンダ オッキーンダ。(26歳? では大きいんだ。) [幡 2005]
- ・ンダ モッタイナーンダ。(そうだ、もったいないんだ。) [幡 2005]

【形容名詞述語・名詞述語】

形容名詞述語と名詞述語はほぼ同じ活用となる。

〈断定非過去形〉

「シズガダ」「ガクセーダ」のように、形容名詞述語、名詞述語とも形容名詞、名詞にそれぞれ「ダ」を後接する。

- ・イーデ ダイヂョブダ。(いいよ、大丈夫だ。)
[幡 2005]
- ・ニンキョ ョーカギ チョーゾダ。(人形を描くのが上手だ。)[幡 2005]
- ・ダイカクセーダモンネ。(大学生だもんね。)
[幡 2005]

〈断定過去形〉

「シズガダッタ」「ガクセーダッタ」のように、形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ「ダッタ」を後接する。

〈推量形〉

「シズガダベー」「ガクセーダベー」のように、形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ「ダベー」を後接する。

- ・ハダヂダベー。(二十歳だろう。)[幡 2005]

〈連体非過去形〉

形容名詞述語では「シズガナ」のように形容名詞に「ナ」を、名詞述語では「ガクセーノ」のように名詞には「ノ」を後接する。

- ・ブッソーナドゴダツタンダヨナイ。(物騒なところだったんだよね。)[幡 2005]

〈連体過去形〉

連体過去形と断定過去形は同形で、形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ「ダッタ」を後接する。

〈中止形〉

「シズガデ」「ガクセーデ」のように、形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ「デ」を後接する。

〈仮定形〉

「シズガダラ」「ガクセーダラ」のように、形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ「ダラ」を後接する。

- ・センセーダラ シッテPPER。(先生なら知っているだろう。)

〈否定形〉

「シズガデネー」「ガクセーデネー」のように、形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ「デネー」を後接する。共通語化の影響で「ではない」に由来する「ジャネー」も聞かれるが、本来の形式ではない。

- ・アノヒトワ センセーデネー。(あの人は先生ではない。)

〈なる形〉

形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞にそれぞれ助詞「ニ」を付し、さらに「ナル」を後接する。「ニ」は「ン」となることが多い。

- ・ミミ ツンポンナッタガ。(耳が聞こえなかったか。)[幡 2005]
- ・コノヘンモ ダエブ シズガンナッタナエ。(このあたりもだいぶ静かになったね。)

〈丁寧形〉

形容名詞述語、名詞述語とも、断定非過去形に「ゾエ」を後接する。

〈のだ形〉

形容名詞述語、名詞述語とも、形容名詞、名詞に「ナ」を後接し、さらに「ンダ」を付す。

- ・アレ マダ ガクセーナンダツケド。(あの人はまだ学生なんだそうだよ。)

用例出典

- 清野吉巳 (2007) 『しのぶのむかしばなし』(CD) 音楽社プロジェクト
- 幡早夏 (2005) 「福島県方言に関する口語コーパスの収集とその分析」『言語情報学研究報告』8
- 福島大学人間発達文化学類国語学研究室編 (2015) 『被災地の小中学校における方言教育実践の構築—地域方言の継承に向けて—』2014年度文化庁委託事業報告書

参考文献

- 飯豊毅一 (1964) 「南奥方言と関東方言の境界について—福島県を中心として—」日本方言研究会編『日本の方言区画』東京堂出版
- 井上史雄 (1985) 『新しい日本語—新方言—の分布と変化』明治書院
- 井上史雄 (2000) 『東北方言の変遷』秋山書店

菅野宏(1982)「福島県の方言」飯豊毅一・日野資純・
佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の
方言』国書刊行会

(半沢 康)